

第4回 将来ビジョン検討会議 川本氏スピーチ概要

「環境共生時代の地域づくりと地域育て」

(環境をどのようにとらえるか)

- ・環境について改めて考えると、「自然環境をどう保全するか、守るか」ということが主となるが、社会との相互作用の中で様々に変化することを考えると「社会」という視点が不可欠であろう。
- ・よく言われる社会における3E（「経済の発展 (Economy)」 「資源・エネルギー・食糧の確保 (Energy)」 「地球環境の保全 (Environment)」) をバランスよく、常に考えながら、新しい時代に向けてどう展開していくかである。その際基調となる考え方は「持続可能性」であり、常に先を思い描きながら環境を捉え、前に進めていくことが大事である。

(共生とは)

- ・(人類は物事を) 対峙、対立という二項目対立により捉え、様々な問題が生じてきた歴史があるが、対立ではなくお互い協調するような関係性のものをいかに作り出すか、それを具体的に機能させるかという動きのある営みが「共生」であると考えられる。

(福井におけるまちづくりの中での環境変化および課題)

- ・環境と共生する時代に向けて、今福井でどういうことが起き、育てていくべきかについて述べる。
- ・まず、住民参加の広まりである。一つ目に、住民参加が大きく広がり、企画、計画段階からごく自然に、また一般的になりつつある。二つ目に、目的意識をもった同志、有志による諸活動の活躍、三つ目に、世代、地域を超えた環境活動の活発化。最後に協働、共働がキーワードになっており、自治体レベルでも条例に使用している。
- ・次に過疎と高齢化の全域化・常態化であるが、福井県にも100以上の限界集落があり、この地域をどのようにしていくかという課題がある。また、国土保全機能の低下、全国的であるが過疎と高齢化が、都市部さらには郊外部で進んでいることである。
- ・次に自動車社会の再考と公共交通の復権であるが、福井県は依然自動車の保有台数トップ、また車社会であり、引続きその傾向は続いている。しかしながら、環境の問題や持続可能性を考えて、車依存からの転換が具体的な施策に反映され、

量的なものや実効性はこれからだが着実に進められている。あと低環境負荷型のまちづくりということで、コンパクトシティへの指向や交通手段として路面電車を使用した環境に優しいまちづくり等が検討されている。また、環境的に持続可能な交通に向け、低公害車の導入などが進められている。

- ・次に安全安心の問題である。自然災害との付き合い方にも環境との向き合い方がある。環境というと自然保護だけではなく、コントロールする、共に生きる部分をもう一度考え直して次世代に活かす、生活スタイルを変えていくことも大事である。また、食の安全と確保であるが地産地消が、地域おこしに繋がっている。また、交通安全対策の質的变化だが、交通事故死者数は減少しているが中身が大きく変化していることが注目すべき点である。最後に廃棄物との向き合い方は必然である。
- ・次に景観・文化であるが、景観が社会的価値として公的に認定される社会になった。さらに景観を利用したまちづくりの具体的な取組みも進んでいる。あと、里地里山の保全・活用、日常生活圏域を超えた広域連携、都市と農山漁村との対流・交流についても具体的な取組みが進んできている。
- ・最後に生活空間の再構築である。土地利用の見直しは今までは他地域に倣い拡大を行ってきたが、環境再生を考える場合、創造的縮退（スマートシュリンキング）に向けた見直しが必要となってきた。

（これからの10年（2020年頃）の環境とまちづくりを見据えた課題）

- ・これからの環境とまちづくりを見据えた課題は何かということであるが、一つ目に多様な環境と環境“感”の思考・試行を醸成していくという観点が必要である。環境は固定しているものでなく常に変化しており、私たちもそれに合せて動いていくことが大事だと思う。
- ・二つ目に自然環境は「復元」にこだわらず、「創出」も積極的に認めることが大事である。今あるものを守るだけでなく、新しく創ることも大きなテーマになる。
- ・三つ目に人も環境と共に育つという発想と実感ということだが、ヒューマンスケールを超えたところで様々な問題が起きており、私たちは自然の中で生物の一つとして生きていることをもう一度考え直し、自然と対話しながら考え、実行していくべきである。
- ・四つ目にトータルなエコ生活ということだが、エコな暮らしを断片的に見るのではなくトータルなエコを目指すべきで、社会の仕組みがそうなっているのかが大事である。小さく考えて大きなものに繋げていく道筋や見せ方を考えなければな

らない。

- ・五つ目に支点、力点、作用点の洞察力であるが、どこを軸に力を入れて、どこに作用させ、どのタイミングで行っていくか戦略的なものが大事であろう。
- ・六つ目に共生社会の見せ方であるが、地域のありのままの環境をもっとうまく見せることが大事である。マーケットの世界であるが、単に見せるだけでなく、魅力的なものにする、味わってもらい、美しくする、それを売っていく、という発想のもとで展開することが大事である。
- ・最後に需要追随（量）ではなく価値創造（質）の環境理解であるが、量的に少ないというところからスタートするのではなく、環境はまず「質」から問う姿勢が大事であろう。

以上